

角さんとエルマーさん、 京都「日々」で漆を語る

エルマーさんは、チューリヒとベルリンの二か所で、角さんの展覧会を企画。一か月の展示を終えて、帰宅したばかり。まずは、とびきりホットな現地の報告話から――。

エルマー ベルリンのオープニングでは、三〇〇人くらい来ていた。角さんのへぎ板おにぎりやから揚げをのせて出したら、みんな興奮してね。「触ってもいいですか?」と言うから、「どうぞ手にとって見てください」。おにぎり食べて触るから、作品がベタベタ。(笑)

角 そんなに、みんなが触ったの?
エルマー みんな、もうびっくりしていた。角 ドイツの人に漆の説明はしなかったの?
エルマー 僕も、最初は説明が必要かと思っていた。最近、ドイツやヨーロッパでは東洋

「漆碗見て

『うわっ、とろっとしとる』

そんな言葉で

職人は言うらね



趣味の安物かはやっていて、レベルが非常に低いものばかり。でも触ってみて「えっ、すごい」。形、色、つや。違いがみんなわかる。角 ドイツの人は、漆の触感をどんなふうに味わったのかいな?

エルマー こうやって(抱きかかえるようなしぐさで)なでなでして。「つるつるしている」とか「固いけど柔らかそう」とか。「滑らか、赤ちゃんの肌を思い出す」とか。

角 輪島では職人がよく言うけれど「うわっ、とろっとしとる」。そんな感じなんやね。

エルマー 言葉より、手にとったときの顔つきや雰囲気がよくわかる。嫌な顔つきは一度もなかった。うれしそう顔ばかりね。

角 買うてくれたのはどんな人たちなの?

エルマー 年齢も性別も関係ない。きれいなオブジェと買う人もいるし、サラダボールが欲しいと大きな鉢を買った人が二日後に来て「主人と私の小さなボールが欲しくになりました」。その人はコレクターではなく主婦さん。

角 丸い重箱は、どうやったの?

エルマー 楕円形がすごい人気だった。新しい蒔銀の暗いつやにひかれてた。

角 重箱とお碗を、どうやって飾ったの?

エルマー 重箱は、全部で九つ。角さんの重箱は存在感がある。重さがある、いい意味で。ダイテールもすごくきれいだし。魅力を一つ一つわかってもらうため、間をあげて一つの台に一つずつのせた。まるで彫刻の展覧会みたいだった。しかし、よかったことは、普通

角 偉二郎の 漆世界





目で説明しなくても

触ればわかる。

ドイツの人も滑らかとか

優しい、と言っていた

の美術品ではないということ。見ていると美術品と同じに迫力があるけれど、用と美と両方楽しめるということね。

角 ずっと前の展覧会では、重箱を買った夫婦が、ご主人はパイプのコレクションを入れたい、奥さんは自分の布を入れたいと、それぞれ主張してたことがあったね。

エルマー みんな、大切なものを入れたくなる。その人の宝物を。今回もね、フルーツサラダを入れたという人がいた。下の段にパイナップル、その上にオレンジ、その上段はいちごとか。

角 きれいやろね。いつだか、いちばん上等な下着を入れたという若い人がいて、あれには驚いたね。

エルマー 今回の展覧会で、一週間毎日見ている、角さんの重箱、すごい。膨らんできた。表面に出てきた形、すごくいいと思った。

角 そうかね(うれしそうに相対崩して)。この間、こういう(両腕を輪にして)大きい鉢を作ったことやが。一尺八寸(五〇センチ)あって。エルマー えっ、すごい。こね鉢?

角 もっと深い。樗やがね。縁はわらび紅。エルマー わらび紅はいいですね。ベルリンでもわらび紅の小椀が最初に売れた。飾りつけの最中に来た人が、欲しいって。

編集部 わらび紅って、どういうものですか。エルマー 角さんがつくった色と名前ですね。角 門前(町)に工房を移したら、あそこは周りにわらびがよく出るんですわ。ほっておくと、こんなに丈が高くなる。風に折れたり傾いて、だんだん土に近づいていく感じがある。もつとたつと幹が枯れて、肌が紅の妖しき色になる。それでもなお、色をもつ。そういう色をつくってみたいと、わらび紅。

エルマー 角さんは、いつも無理に新しいものを作るのではなくて、心のままに自然の形でものが生まれてくる。川が流れているのと同じように、自然にわいてくるような感じ。その都度その都度おもしろいものがある。

角 昔、私の作ったものに初さが消えたと指摘した人がいて、作り手として悩んだことがあってね。その時、エルマーに聞いてもらったことがある。「初さをねらったら、もつとひどいことになる」と言われて、目が覚めた。

エルマー 角さんは例の少ない物作りだと思う。東南アジアとか、人間があらゆるところで作ってきたものに関心があるし、美術館で現代アートも見る。これつまらないと(頭から)拒否することをあまりしない。好奇心をいつももって、ポジティブにもものを見て吸収する。ものを見る見方と生き方が、奥ゆかしくて豊かなものを作り、飽きがこないということに関係してくるのだと思う。

角 自分の中に、定規をもちたくないというのは、確かにずっとあるわいね。また元気が出てきた。よっしゃ、やるぞお。

エルマー・ヴァインマイヤー ● 父は下地職人、母は蒔絵の職人であった。1955年、沈金師に師事。1962年に日本現代工芸美術展に入選。日展にも17回の入選や特選を果たすが、1983年以降、一切の公募展から退き、漆の可能性を探りながら、輪島の職人との協働に思いを巡らせ、独自の境地を切り開いている。

エルマー・ヴァインマイヤー ● ギャラリー「日々」主宰。哲学博士。比較文化、芸術、哲学の研究を続けるかたわら日本とヨーロッパを中心に文化交流事業を営む。日本の美術工芸の紹介からアーティストの公演プロデュースまで、幅広い分野で活動中。京都市内で粋に暮らす。

かどいさぶろう ● 1940年石川県輪島市生れ。父は下地職人、母は蒔絵の職人であった。1955年、沈金師に師事。1962年に日本現代工芸美術展に入選。日展にも17回の入選や特選を果たすが、1983年以降、一切の公募展から退き、漆の可能性を探りながら、輪島の職人との協働に思いを巡らせ、独自の境地を切り開いている。



お正月、
祝いの形
特集



「昔ながらの能登のお雑煮。
丸餅に岩のりをのつけただけ。

シンプルでしよう」角

「うわあ、おいしそう。」

合鹿椀は、ほんとうに強い器ですね」三

